



穴水より、



愛をこめて。

町を変えるのは、政治、メディア、それから…
『はりぼて』『裸のムラ』の五百旗頭幸男最新作は
真骨頂にして新境地

能登デモクラシー

監督:五百旗頭幸男 | 撮影:和田光弘 | 音声:石倉信義 | 題字・美術:高倉園美 | 編集・撮影:西田豊和 | 音楽:岩本圭介
テーマ音楽「穴水ラブソディー」 作曲:岩本圭介 | 音楽プロデューサー:矢崎裕行 | プロデューサー:木下敦子 | 製作:石川テレビ放送
配給:東風 | 2025年 | 日本 | 101分 | DCP | ドキュメンタリー | ©石川テレビ放送 notodemocracy.jp



おなかがおなかが
すまません。

究極のオールドメディアともいえる過疎地の手作り新聞。震災後の号に「私たちは生きています」と書き入れるとき、その筆の逡巡が雄弁で、

本物の言葉を見たという気がした。

滝井さんは任人や議会に声をかけ続け、妻の順子さんは何度も「ありがとう」と口にする。そんな「言葉を手渡す」という切実な営みが、即席の引用やリポストでは届かない扉をノックし続ける。

岨手由貴子

映画監督

草の根新聞と、その活動を報じたテレビによって、民主主義の萌芽が見える。

間違いない良作、だけれど、なんだか五百旗頭さんらしくないな……

と思っていたら

最後にすげえのきた！

問い質すタイミングも含め、最高だ。これぞ五百旗頭ワールド。

民主主義は、やっぱり簡単じゃないよね。

大島新

ドキュメンタリー監督

能登の物語を観ることで能登の人を応援できれば……

なんて些か傲慢な意気込みで観始めたが、むしろこれは能登の外側にいる人々を奮い立たせるエンパワーメントドキュメンタリーだ。

衰退の一途を辿る民主主義を手繰り寄せ、自らの手で社会を操舵し始めた穴水の姿は希望そのもの。

「なら我々も政治を変えられるのでは？」と、鼓舞されずにはいられない。

この社会で市民が持つ力を思い出させてくれる、

今の国に最も必要な映画ではないだろうか。

ISOライター

能登半島の中央に位置する石川県穴水町。過疎化が止まらず人口減少の最終段階に入っている。コンパクトシティを推進する町の中心部から悪路を進んだ限界集落に暮らす元・中学校教師の滝井元之さん。2020年から手書きの新聞「紡ぐ」を発行し、利益誘導型の政策や町の未来に警鐘を鳴らし続けている。穏やかな穴水湾をのぞむこの町の伝統漁法「ボラ待ちやぐら」。我慢強さは町民性ともいえるが、滝井さんはこう記す「何もしなければ、何も変わらない」。石川テレビのクルーは市井からの眼差しにローカルメディアの存在意義を重ねながら、情性と忖度蔓延る役場と町議会の関係の歪さを浮き彫りにしていく。

2024年1月1日、能登半島地震が発生した。

カメラは思わぬ事態に見舞われた町と人びとの営みをつぶさに見つめる。そして、同年5月に放送されたテレビ版が、穴水に大きな風穴を開けた。「このままでは町がなくなる」。声を寄せ、届け、耳を傾ける。映画は確かな変化の芽吹きを映し出していくのだが。

監督は石川テレビの五百旗頭幸男。『はりぼて』では富山市議会の不正を暴き、市議が次々とドミノ辞職。ムラ社会の父権的な空気をあぶり出した『裸のムラ』は、映画公開後に馳浩石川県知事の定例会見拒否問題にまで発展した。映画の終盤、こことばかりに、まことしやかに囁かれる穴水町最大の「タブー」に斬り込んでいく五百旗頭。投げかけた言葉に込めた思いとは。

この町で、この国で、果たして民主主義は生き残れるのか。一縷の望みに賭ける穴水からのラブレター！



notodemocracy.jp
@noto_democracy
@tofoo_films



5月17日より公開

全国共通特別鑑賞券¥1500(税込)



ポレポレ東中野
03 3371 0088 pole2.co.jp
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分
都営大江戸線A1出口より徒歩1分



>>>>>5月17日(土)五百旗頭幸男監督による初日舞台挨拶あり<<<<<<